

# 私の異文化心理学 フィールドワーク in Sweden

広島大学医歯薬保健学研究院小児科学教室 特任助教

**西川里織** (にしかわ さおり)

私は、2000年秋から約10年間スウェーデンの大学と大学院で過ごしました。10年を一枚にまとめることは難しいので、ここでは学士課程の話をしたと思います。短大で教職免許を取得後、スウェーデンに留学すると決めた頑固な私は、カールスタッド大学へ留学することができました。そこでたまたま教育に関する心理学が英語で開講されており、自分の思春期時代を考えることができたことから心理学に深く興味を持ちました。私は中学生時代ほとんどを保健室で過ごしたので、同じような境遇の子どもたちのためになるカウンセラーになりたいと思ったのです。

スウェーデンの大学には臨床心理士や認知心理学プログラムの専門的なコースと、私が履修したような他専攻の学生も履修する一般心理学のコース(レベルAからD)があります。学部では大学院の学生が授業を受け持つことが多く、博士号を目指しながら教育に関わる姿は私にとって憧れでした。心理学Aから次に進むにはスウェーデン語でしか授業が無かったので、次の一学期間は英語で開講された政治学の授業を履修しながらスウェーデン語を自習、そして先生に頼んでスウェーデン語の心理学Aの授業を受けさせてもらい、ある程度授業について行けることがわかってからBコースに臨みました。授業がよくわからなくても英語の教科書をしっかり読めばいいので助かりました。しかし、授業に出ても実践的なグループワークが多く、外国人、特に控えめな

日本人の私がスウェーデン人の中に入って議論することは難しく、自己改造しなければなりません。日本なら黙っていても誰かが声をかけてくれるかもしれないという甘えの概念がありますが、個人主義の世界にはそんな人いません。自分から積極的にスウェーデン人の中に入っていかないといけないことが苦痛で、他の学生の足を引っ張ることが申し訳なくて悩みましたが、遠慮しては生きていけないと自分からしがみついていく決意をしました。

さらに影響を受けたのが、教育心理学の本で知ったMarkus & Kitayama (1991) やデビッド・マツモト氏による集団-個人または独立-個人的自己感という文化差の概念です。自分と文化の違う他者との関わりを理解することができたことから自己概念に興味を持ちました。

私がグループワーク以上に苦手なものは、筆記試験でした。一行の短い質問に用紙一枚以上の正答を記入しないと点数が取れないことがあり、はずかしながら自分一人だけ再試験を受けるはめになったこともあります。特に統計学では試験問題をスウェーデン語で理解したうえで計算問題を解かないといけないというハードルの高いもので、ある日、「私はここで授業を受けても無駄だ! 透明人間みたい!」とたまらなくなり授業を抜け出し図書館で一人泣いた日もありました。それでも不合格のスウェーデン人もいた中、私はギリギリ合格していたのです! 思わず廊下で飛び上がってしまいました。また、



## Profile — 西川里織

2010年、ウメオ大学臨床学部精神・医療心理学科博士課程修了。Ph.D (Medical Psychology)。長崎大学医歯薬学総合研究科研究員を経て、2013年より現職(広島大学博士課程フェニックスリーダー育成プログラム)。現在の研究テーマは、子どもの社会脳・メンタルヘルスにおける遺伝子×環境の相互作用など。

コースごとに課題レポートも多く、テーマを立てて論理的に考査することを学び、思ったより良い評価をいただけたことも自信になりました。心理学Bの課題研究では日本の中学生の自己感について研究し、さらに卒論にもあたるCコースではよりアカデミックな心理測量を取り入れた自己概念の調査に取り組み、最終的にはスウェーデンと日本の国際比較をすることを目標としていました。先生と研究計画を立ていくうちに浮かび上がる限りない研究テーマを前に、研究者になりたいという気持ちが芽生え、現在運良く夢が叶っています。

留学というものは、自分の人生やキャリアを考える中で、プラス・マイナスどちらの部分もあると思います。しかし外国での経験はこの後の人生にも深く影響し、自分自身に深く染み付いていると感じています。それは留学中に日本文化が自分自身に醤油のように染み付いていると感じたことと同じです。日本に戻ってもまだまだ修行中の身、私の旅は続きます。